

るものではなく、より後の時代における改新形であるという。結局、第三口蓋化は三つの口蓋化のなかで最も古く、口蓋化の歴史的順序は「第三口蓋化→第一口蓋化→第二口蓋化」ということになる。

このような Lunt の説に対してはすでに、彼の使用した資料がきわめて限定されていることなどいくつかの重要な疑問点が提出されているが、⁽⁴⁾ しかし、Lunt とは異なる条件をたてつつも、口蓋化の歴史的順序については同一の結論をだしている Jacobson⁽⁵⁾ の研究もあり、第三口蓋化の研究は新段階に入ったと言うべきであろう。Lunt の説が直ちに伝統的解釈に取って代るものとは言えないであろうが（何故なら、それは伝統的なスラヴ語音韻史研究の成果の再検討を迫るものだからである）、今後第三口蓋化の研究が新たなレベルで論ぜられる契機となる画期的な説であることは疑いない。

注(1) 口蓋化の相対的時期に関する伝統的

解釈の見直しは R. Channon, *On the Place of the Progressive Palatalization of Slavic*, The Hague and Paris, 1972, から始まるようである。但し、筆者未見。

(2) G. Y. Shevelov, *A Prehistory of Slavic*, Heidelberg, 1964, pp. 338~355

(3) H. G. Lunt, *The Progressive Palatalization of Common Slavic*, Skopje, 1981

(4) Д. Д. Беляев による(3)の書評(ВЯ, № 3, 1984) 参照。

(5) G. Jacobson, *Эвристический подход к третьей палатализации задненебных в славянских языках*, в кн.: *Этимология 1984*, М., 1986. 彼は1973年にはすでに、第三口蓋化が最も古い、との結論に達していたようである。

「存在文」をめぐって

山 崎 紀 美 子

ロシア語の伝統文法では、Нет времени. に類する存在否定文は、無人称文の一種として正式に登録されているが、一方 Есть надежда. など否定を伴わない存在表現については登録先が定まっていない。

このような不自然な状況から脱却すべく、たとえば Шведова は、1970年版のアカデミア文法書において、伝統的名詞文に бытийность の意味を求めて、次の a, b, c をひとつのグループにまとめようとした。

- ② Ночь. Тишина.
- ③ Будет ночь. Была ночь.
- ④ В воздухе гарь. Сыну год.

しかし、Шведова はこのグループを1項文の下位分類に納めていたため、Шмелев 1976, Белошапкова 1977, Золотова 1978 などから反論が出され、1980年版のアカデミア文法書において、Шведова は④を структурная схема から семантическая схема に後退させてしまった。これは、ページ数の多いアカデミア文法書における、ほんの小さなできごとではあるが、ロシア

語の構文研究の将来を暗示する重大事件であるように思われる。存在表現を構文として正式に登録するか、あるいは、伝統的1項文↔2項文という分類に固執するか、という選択において Шведова は後者を選び、これにより存在文は宙に浮いてしまった。しかし、唯一の分類基準、たとえば1項文—2項文という分類基準をすべてのロシア語文に適用しなければならないという法律があるわけではない。因に、⑥については、2項文に入れるべきだという意見は出ていないようである。

このような状況にあって出版された Арутюнова と Ширяев の共著1983には、存在文のモデルとして

〔場所を示す語句+存在を示す動詞+名詞〕という構文が呈示されている。ただし存在文に対立するモデルについては十分な説明がなされていない。存在文の規定には主格成分の位置、つまり語順についての規定が不可欠である。これに関する最も単純明解な提案は、三上1958が日本語の文型について述べている主格型(N型)と位格型(L型)の分類である。

- N型 { 私_ガ野心ヲモッテイル (コト)
彼_ガ遠クヲ見ル (コト)
L型 { 私_ニ野心ガアル (コト)
彼_ニ遠クガ見エル (コト)

ロシア語も日本語に劣らず位格型(L型)が発達している言語であるように思われる。

- N型 { ① Я никогда не видел её такой красивой.
② Это не имеет значения.
③ Поход на Москву через Смоленск не состоялся.
④ У нас нет времени.
⑤ В рукописи есть ошибки.
N型 { ⑥ Вдалеке слышался

стрекот вертолета.

⑦ У меня болит голова.

上記例文のうち、①～③は主格型、④～⑦は位格型の例であるが、伝統的分類では、④のみが無人称文、残りは人称文扱いとなる。

一方、存在表現を「コトガラ」として捉えずに「モノ的」に捉えた場合には、存在文は伝統的名詞文(1項名詞文)と接触し、それらは2項名詞文と対立する。

- { 1項名詞文 (Была) ночь.
2項名詞文 Это (был) Антон.

この対立においては、動詞の有無はもはや意味をもたず、名詞(句)が1個であるか2個であるかだけが分類の基準となる。

つまり、存在文は、L型動詞文として見れば、N型動詞文と対立し、1項名詞文として見れば、2項名詞文と対立することになる。

〔存在文の二面性〕

N型動詞文 ↔ L型動詞文
1項名詞文 ↔ 2項名詞文

存在文のもつこの2面性を無視して、名詞文的枠組からだけ存在文を捉えようとするのはロシア語文の実体を歪めることになるのではないだろうか。

引用文献

- ◇Арутюнова Н. Д. и Ширяев Е. Н. Русское предложение. Бытийный тип, М., 1983
◇Белошапкина В. А. Современный русский язык-Синтаксис. М., 1977
◇Золотова Г. А. К типологии простого предложения. ВЯ 1978 № 3
◇Шведова Н. Ю. Простое предложение. В ГРАММАТИКЕ АН СССР 1970;
Простое предложение. в ГРАМ-